



小児がんセンターたより

小児がんは、国内でおおよそ年間 2,000~2,500 人の発症が見込まれる疾患です。希少がんとも言われて、よく知られていない現状があります。昨今では、小児がんについても国が対策に力を入れており、より充実した対応ができるように、小児がん拠点病院を設置しています。神奈川県立こども医療センターも関東甲信越地区の小児がん拠点病院として、小児がんへの対策に力を入れて取り組んでいます。小児がんは希少なゆえに、症状が出現してもなかなか正確な診断にたどり着かない場合もあるようです。

小児がんを専門にしていない地域の先生方にも、小児がんについてご理解を深めていただくように、東京都が「小児がん診断ハンドブック」を作成しています。以下の URL でハンドブックがご覧になれます。是非、ご活用ください。

http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/iryo/iryo_hoken/gan_portal/research/taisaku/shoni_taisaku/shounigann_shinndan_n_handbook.html

小児がんセンター長 長場直子

【セミナーや研修会のお知らせ】

- 1月13日(土) 小児がん相談支援室セミナー:当施設講堂
- 2月17日(土) 小児がん Day イベント:横浜東口そごう前
- 3月 3日(土) 小児がんセンター市民公開講座:TKP ガーデンシティ横浜

詳しくは、ホームページでご確認ください。

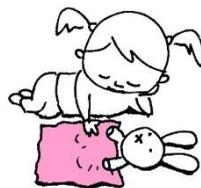
小児がんをもっと知って！

小児がん在宅ケア研修会を行いました。

平成 29 年 10 月 5 日（木）、神奈川県立こども医療センター講堂において、第 2 回小児がん在宅ケア研修会・在宅医療連携カンファレンスを行いました。年間に数件ですが、小児がん患者さんがご家庭での療養をご希望され、在宅で終末期を過ごし、人生の終焉を迎えることがあります。こども医療センターでは、地域とより良い連携を図り、ご自宅で安心して過ごせるように、昨年から在宅医の先生や訪問看護師さん等と一緒に、実際に在宅で過ごされた症例について検討を行っています。研修会では、院内外から 48 名の医療関係者の参加がありました。ケース報告では、当施設から治療状況や家庭で過ごすことを決めるまでの経過について説明し、在宅での状況は、お世話になった診療所の医師をはじめ、薬剤師・ソーシャルワーカー・臨床工学士の方々にお願いいただき、それぞれから訪問時の状況についてお話をいただきました。

最後まで治療を迷われているご家族の気持ちやこどもへの病状説明が難しい中で、こどもや家族の希望する在宅療養をすすめる困難さ、急な病状の進展や苦痛の増強等による緩和ケアの難しさ等、多くの課題が共有されました。

早急な解決策は見いだせないのですが、在宅で患者さんご家族がよりよく過ごせるために、何をしなければならないか、このような症例検討会の場を通して、今後も病院と地域の皆さんと検討を積み重ねていきたいと思えます。





小児がんのリボンカラー：ゴールド

小児がん相談支援室 情報コーナー



治療成績の向上などにより、成人の700人～900人に一人は小児がん経験者だと言われています。しかし、小児がんの病気や治療により、小児がん経験者やご家族が、その後の身体的な成長・発達や社会的な成長・成熟の過程において、様々な問題や課題と直面することが分かってきました。そこで、最近では小児がん経験者に対して、長期にわたるフォローアップの必要性が言われ、その体制づくりが必要とされています。

当センターでも、「長期フォローアップ外来」を始めました。この外来は、治療の終了した小児がん経験者とその家族を対象に、身体的・心理・社会的側面からのアセスメントや健康教育を提供します。90分枠と普段の外来診療とは異なり、経験者や家族の課題やニーズを確認したり、自立支援も含めた子どもや家族への関わりを行っています。実際に、普段の診療では気づけない潜在的なニーズがあることもわかりました。

いずれ大人になっていく小児がん経験者がよりよい生活を送るためによりよい体制を整えていきたいと考えています。

小児がんに関連したご相談は

「小児がん相談支援室」（本館1階7番窓口）までご連絡ください

時間：平日（月～金）8:30～17:15

相談方法：面談・電話・メール

電話：045-711-2351 E-mail：shounigan@kcmc.jp

各部門からのお知らせ

病院長 町田治郎（整形外科部門）

小児の悪性骨・軟部腫瘍で最も多いのは骨肉腫で、日本における発生率は人口 100 万人に 2－3 人です。主として学童期に好発しますが、まれな病気です。幼児期の悪性骨・軟部腫瘍はさらにまれな病気であり、通常の病院での診断や治療は困難です。2001 年から 2015 年までに当センターで切除術を行った小児の悪性骨・軟部腫瘍は 47 例で骨腫瘍 38 例、軟部腫瘍 9 例でした。

2001 年～2015 年 悪性骨・軟部腫瘍 47 例の内訳(2016 年 12 月現在)

悪性骨腫瘍 38 例 骨肉腫 35 例：31 例生存（初診時肺転移 2 例含む）

上腕骨 9 例、大腿骨 15 例、脛骨 8 例、

腓骨 3 例

ユーイング肉腫 3 例：2 例生存

悪性軟部腫瘍 9 例：全例生存 滑膜肉腫 3 例、横紋筋肉腫 2 例、

骨外ユーイング肉腫 2 例 その他 2 例

手術を整形外科が担当し、薬の治療は抗がん剤のエキスパートである血液・再生医療科が担当しています。手術にあたっては神奈川県立がんセンターの整形外科医にも来て頂いています。血管柄付き腓骨移植や皮膚移植が必要な場合には当センターの形成外科にお願いしています。術後のリハビリも小児に慣れたスタッフが行うので安心です。肺転移が生じた場合には可能な限り外科が摘出術を行います。担当する病棟の看護師も抗がん剤の治療や手術後の管理に慣れていますが、また緩和ケアチームも治療の始めから関わっています。

まれな病気である小児の悪性骨・軟部腫瘍ですが、これからも当センターの強みである質の高いチーム医療でがんばっていきます。

どうぞよろしくお願いたします。

